

〔論文〕

第二次世界大戦前における「南洋群島」 とフィリピンの日本仏教

ミチヒロ・アマ

Michihiro AMA

その別院の陣容はこの特殊の地にまことに適はしい人々をもって堅めることとなり昨四日発表された。即ち初代輪番は橋哲雄氏でその下に参勤として戸田正真、藤本寛瞭、西真雅の三名が任命された。即ち輪番の橋氏は大東亜戦の一兩年前までハワイに開教し歸朝してから大陸にまた開教の任にあたった人で柔道五段の猛者である。而して参勤の三氏がまた實に面白いことにはいづれも数年、十餘年間といふハワイ開教に従事した人々で現に大東亜戦争と共に敵米國に囚はれ抑留生活を送ってゐる内、内地に歸って大陸に南方に奉公したいといふ強い念願から第二交換船の帝亜丸で歸還の途マニラへ途中下船をした人々で要するに輪番以下何といても米化した比島人の心理をハワイ開教の経験ですぐ把へて一種独特の活動をするといふ打つてづけの「役者摺ひ」の異色別院陣容がここに大東亜戦を契機に出来たのである¹。

はじめに

太平洋戦争勃発に伴い、ルーズベルト大統領が発令した「大統領令 9066 号」により、アメリカ大陸西海岸州に居住していた 120,000 人近くの日系人が強制収容された。ハワイの日系人は難を免れたものの、仏教教団の開教使をふくむ日系社会の

1. 「米化した比島人を相手には打つてつけ」『中外日報』1944年3月5日。西本願寺の『海外開教要覧』では、藤本寛瞭と西真雅はマニラ別院着任が確認できた一方、ハワイ在勤は確認できない。戸田正真と龍溪玄深がハワイで在勤をしていて1943年12月にマニラ別院に着任している。

リーダーは抑留されている。『中外日報』に紹介された前記の記事は、アメリカで収容された浄土真宗西本願寺派（以下、西本願寺）の開教使が、抑留中の日米民間人交換船に乗船したものの日本に戻らずフィリピンで下船し、マニラ本願寺で布教活動をしながらか東南アジア教線拡張に加わったことを伝えている。

今日まで、戦前にハワイ・北米大陸、「満洲」、朝鮮半島、台湾に進出した日本仏教については多くの研究がされてきた²。一方、フィリピンをふくむ「南洋」地域に進出した日本仏教についてはほとんど目が向けられなかった³。しかし上記の記事が示すように、フィリピンは「南方」へ教勢を張る各宗派にとって「南洋群島」と共に重要な拠点であり、「南洋」地域に展開した日本仏教を考察することは20世紀前半に大日本帝国の拡張と共に行われた海外布教の研究に新たな視座を加え、アジア・太平洋宗教研究にも貢献する。また「宗教」と「植民地主義」の研究は欧米研究主導のもと「大西洋地域」と「キリスト教」に集中してきたが⁴、「太平洋地域」と「仏教」に焦点をあてることで、従来とは異なる「宗教」と「植民地主義」の関係を提示することができる。本稿では「南洋群島」とフィリピンに進出した仏教教団の動向を地政学的観点から考察し、沖縄県移民への布教と「南洋群島」での先住民族への布教を中心に論述する。特にサイパン島のガラパン、パラオのコロール島、フィリピン（主にミンダナオ島のダバオ）に注目する。当時は「先住民」という用語はなく、差別的な言葉が使われたが、「南洋群島」の現地住民（現在のミクロネシア人）は「島民」ともよばれた⁵。フィリピンの「先住民族」の定義は一様ではないが、スペインとアメリカの植民地支配者から侵略と搾取を受けた「文化的少数者」と位置付けてお

2. 例えば、守屋友江『アメリカ仏教の誕生—二〇世紀初頭ハワイにおける日系宗教の文化変容』（現代史料出版、2001年）、Michihiro Ama, *Immigrants to the Pure Land: The Modernization, Acculturation, and Globalization of Shin Buddhism 1898–1941* (University of Hawai'i Press, 2011)、木場明志・程舒偉編『日中両国の視点から語る植民地期満洲の宗教』（柏書房、2007年）、Hwansoo Kim, *Empire of the Dharma: Korean and Japanese Buddhism, 1877–1912* (Harvard University Press, 2013)を参照。

3. 先行研究として中西直樹が「南方」方面の各宗派の進出をまとめた論文がある。中西直樹「附章 南洋布教の概要」『植民地台湾と日本仏教』（三人社、2016年）、309–344頁。本論文と中西論文は内容的に重複する部分があることを記しておく。その他、先行研究として小島勝の二つの論文があげられる。「南方関与の多重性と教育の論理—フィリピンとバギオ日本人学校の混血二世教育」『重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて』第27号(1996年)、75–118頁。小島勝「マニラ本願寺布教使・山之内秀雄師の文化交流活動」『渡邊隆生教授還暦記念論集 佛教思想文化史論叢』（永田文昌堂、1997年）、1371–1387頁。

4. David Chidester, "Colonialism and Religion," *Critical Research on Religion* 1, no. 1 (2013): 87–94.

5. 「南洋群島」における「島民」の概念については今泉裕美子「太平洋分割のなかの日本の南洋群島統治—委任統治と「島民」の創出」荒川正晴ほか編『岩波講座世界歴史太平洋海域世界～20世紀』（岩波書店、2023年）、260頁を参照されたい。

く⁶。仏教各宗派が「大東亜共栄圏」の構築と「大東亜戦争」に加担し、沖縄県移民、「島民」、東アジア地域からの移民、フィリピン人、フィリピンの先住民に帝国日本の教育と価値観を強制したことは紛れもない事実だが、同時に従来の植民地布教史研究は「侵略加担批判の論調」が強いという指摘もある⁷。「歴史修正主義」と「植民地言説」の再生にならないよう注意をはらいながら、「南洋」地域の日本仏教の布教状況を分析する。はじめに「南洋」という言葉を吟味し、「南洋群島」とダバオへ移民した日本人の背景を概説しておく。

1 「南洋」、「南洋群島」、「ダバオ国」

第2次世界大戦以前の「南洋」の定義は定かではないが、現在の台湾、東南アジア、太平洋諸島諸国を含む広域な範囲に及ぶ⁸。「南洋」という概念は帝国日本の「南進論」に関係する。明治以降「南進論」についてはいくつかのタイプがあったが⁹、「南洋」という言葉が一般化するのには、第1次世界大戦が勃発した直後の1914年8月、大日本帝国海軍がドイツ領であった米領グアム島を除く赤道以北のマイクロネシアを攻略し2ヶ月後に占領したことに起因する。南太平洋の旧ドイツ領は「南洋群島」(the South Seas Islands)とよばれ、日本は1921年に国際連盟の委任統治領として支配を開始する¹⁰。委託統治は1933年3月に日本が国際連盟を脱退したことで終わるが、日本の実質的統治は海軍が1914年に「南洋群島」を占領してから、1944年に「サイパンの戦い」および「ペリリューの戦い」で敗戦するまでの30年間に及ぶ。その間、「南洋群島」は「内南洋」、それ以外の地域は「外南洋」と呼称されるようになった¹¹。また「南洋群島」は「裏南洋」、今日の東南アジアは「表

6. フィリピンの先住民族の概念については森谷裕美子「先住民族概念の再考」『九州産業大学国際文化学部紀要』第36号(2007年)、1-27頁参照。

7. 木場明志の藤井健志による東アジア布教研究史の傾向をまとめた記述である。正確には「侵略加担批判の論調に引きずられたことによる、中国平原部・朝鮮に偏った海外布教研究に陥っている」とある。木場明志・程舒偉編『日中両国の視点から語る植民地期満洲の宗教』、46頁。藤井健志「戦前における仏教の東アジア布教—研究史の再検討—」『近代仏教』第6号(1999年)、8-32頁。

8. 例えば1940年に出版された岩生成一の『南洋日本町の研究』では「南洋群島」については全く触れず東南アジア地域の日本町の歴史のみを述べている。また1943年の『第二回大南洋年鑑』には、インドシナ、タイ、フィリピン、マライ、ビルマ、スマトラ、ボルネオ、東インド、内南洋、濠州、新西蘭、太平洋諸島の情報が含まれている。

9. 豊田由貴夫「基調報告南洋とは何か」https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/caas/qo9edr00000ml88-att/n_32.pdf (2024年7月1日閲覧)

10. 今泉「太平洋分割のなかの日本の南洋群島統治—委任統治と「島民」の創出」、249頁。Mark R. Peattie, *Nan' yō: The Rise and Fall of the Japanese in Micronesia, 1885-1945* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 1988), 38.

11. 大澤広嗣「南洋における大谷光瑞門下生の活動—オランダ領東印度と小谷淡雲」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』第36号(2020年)、24頁。

南洋」ともよばれた。一方、「東南アジア」という呼称や概念は今ほど普及していたわけではなかった。太平洋戦争中までは「南洋」や「南方」の呼称が一般的に使用された¹²。

「南洋群島」が示す地域は広大である。南洋庁(パラオのコロール島に1922年3月に設置)によると、「南洋群島は、小笠原諸島の南方赤道以北の太平洋中に散在する、旧獨逸領のマリアナ、カロリン、マーシャルの三群島を総称するものであって、東ははるかに米領ハワイに対し、西はフィリピン諸島及び蘭領セレベスに隣り、南はニューギニア及びビスマルク諸島に面し、北は帝国の南端小笠原諸島及び硫黄諸島に連なっている」という¹³。「南洋群島」は今日の、マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦、パラオ共和国、アメリカ自治領北マリアナ諸島の3つの独立国と1地域にあたる¹⁴。

「南洋群島」の在留邦人の数は著しく増加する。南洋庁設立後、ほぼ5年ごとに倍増し、第2次世界大戦の終戦時(1945年)には10万人にまで達していたと推定される。「南洋群島」への移民が増えた原因として、第1次世界大戦後の国内不況、サイパン島・テニアン島・ロタ島に進出した日本の製糖会社がサトウキビ栽培のため労働者を募集したこと、1923年の関東大震災と世界恐慌の影響があげられる。また「南洋」という言葉にロマンチックなイメージを重ねた「南洋ブーム」も「南洋群島」への移民を押し上げた。1924年には日本政府はパラオの本島(現バベルダオブ島)に農業移民を推奨し、移民の村々には日本の名前もつけられた。「南洋群島」へは日本全国から移住したが、沖縄県からの移民が圧倒的に多かった¹⁵。

一方、フィリピンでは「ベンゲット移民」(1903年10月から1904年末まで)が近代の日本からフィリピンへの移民の始まりとされている。フィリピンは1898年にパリ条約のもとスペインからアメリカに譲渡され、その後、日本とフィリピンの交流は本格化される。「ベンゲット移民」はルソン島北部の山岳地帯のバギオに通じるベン

12. 「東南アジア」や「東南亜細亜」という用語は第1次世界大戦中に小中学校の教科書に現れたものの定着はせず、1930年以降一般の書籍や雑誌で使用されるようになったという。また世界で「東南アジア」という呼称と概念が定着するようになった要因は太平洋戦争中にカナダのケベックでおこなわれた米英首脳会談で、連合国軍が「東南アジア司令部」(Southeast Asia Command)の設置を決定したことによるとされている。立川京一「東南アジアにとっての太平洋戦争」『平成24年度戦争史研究国際フォーラム報告書』、67-68頁。清水元「近代日本における『東南アジア』地域概念の成立(I)-小・中学校地理教科書にみる-」『アジア経済』第28巻第6号(1987年6月)、5-6、9-11、15頁。

13. 『南洋廳施政十年史』、「総説」1頁。

14. 今泉、249頁。

15. 荒井利子『日本を愛した植民地—南洋パラオの真実』(新潮社、2015年)、114-116頁。沖縄県に続いて多いのは福島県、「東京府」(主に小笠原と八丈島)、鹿児島県(主に奄美大島)、「朝鮮」、山形県、北海道、静岡県、福岡県、和歌山県、熊本県の順となる(荒井、127頁)。ちなみにハワイへの新規移民は1907年の「日米紳士協定」以降、日本政府が自主的に阻止している。

ゲット道路工事に従事した日本人男性をさし、福岡県、広島県、熊本県などからの農民出身者が3年の期限で渡航した¹⁶。1868年から1941年にフィリピンに移住した日本人は53,115人いたが、日本の支配下にあった地域（「朝鮮」・「満洲」・「南洋群島」など）を除く国外移住者のなかで、フィリピンへの移民は「南洋方面」のなかで一番多かったという¹⁷。移民の多くは道路工事、農業・漁業・林業に従事し商人や娼婦もいたという。ダバオでは日本人移民はアバカ（マニラ麻）の栽培に取り組んだ。1907年には太田興業株式会社が、1914年には古川拓殖会社がダバオでのアバカ栽培に参入し、日本人移住者の増加と共にアバカの生産高を増やした。そして1938年にはフィリピン全土のアバカ生産の半分以上をになうようになった。アバカ栽培の普及でダバオが発展したことから、ダバオは「満洲国」をもじって「ダバオ国」とよばれ、ダバオ在住の日本人人口は2万人ともいわれた。その一方、ダバオに居住する日本人の過半数は沖縄出身者で、女性や未成年者そして「混血児」を多くふくむ「特異な日本社会」が形成された¹⁸。

フィリピンに移住した日本人は複雑な政治体制と社会制度のなかで生活をした。アメリカはフィリピンの自治制を認めコモンウェルス(独立準備政府)を支持する一方、その影響力を保持し続けた。日本が一時的(1942年-1944年)にフィリピンを占領したとはいえ、それ以前のフィリピンは日本人にとって「外国」であり、移民は様々な制約を受けた。「南洋群島」とフィリピンの地政学的環境のちがいは、日本仏教の海外布教の位置づけにも影響する。

安中尚史によると、第2次世界大戦以前の海外布教には「植民地布教」と「移民布教」の2つのタイプがあったという。「植民地布教」が行われた地域は「満洲」、朝鮮半島、台湾など東アジアの諸地域で、「植民地布教」は「日本の強硬な海外進出に追従するような形で展開し」、「時局の移り変わりによって宗門をあげて取り組む姿勢へと変化」した。一方「移民布教」が行われたのはハワイ・アメリカ合衆国西海岸などの地域で「海外移民に追従する形で展開」した¹⁹。安中の類型を考慮すると、戦前の「南洋群島」とフィリピンの布教は「植民地布教」と位置づけられよう。

16. 早瀬晋三『フィリピン近現代史のなかの日本人—植民地社会の形成と移民・商品』（東京大学出版会、2012年）、3、10-11頁。

17. 早瀬、70頁。

18. 早瀬、71-73、189-190頁。早瀬によるとダバオの日本人人口は一般に2万人とされるが、正確な統計はなく、ダバオ日本人会から1943年に発表された19,089人が最大という（早瀬、258頁、注1）。ダバオの日本人人口の増減はマニラ麻市場価格に影響され、1923年の不況時には2,693人まで減った（古川義三『ダバオ開拓記』（1956年、古川拓殖株式会社）、457頁）。またダバオ会報によると太平洋戦争前にはダバオ在留邦人の8割が沖縄出身者だったという（『ダバオ』38号[1986年]、74頁）。

19. 安中尚史「近代日蓮宗の海外布教に関する一考察—植民地布教と移民布教を比較して」『日蓮教学研究研究所紀要』第35号（2008年）、1、12頁。

(各宗派の布教所と開教使のリストは表1を参照。)しかし「南洋群島」の統治に国際連盟が関与した事を考慮すると、理論的には「南洋群島」は日本の「植民地」だったとは言えない(少なくとも日本が国際連盟を脱退するまでは)。一方、フィリピンでの開教は当初は「移民布教」と位置づけられるが、日本軍がフィリピンを占領した後は短期間とはいえ「植民地布教」に変化する。こうした「南洋群島」とフィリピンの地政学の違いを念頭に置いて、仏教教団の布教所設立の由来を述べる。

2 布教所の設立

「南洋群島」で布教所が最初に設立されるのは帝国日本海軍の「軍政期」(1914年-1918年)である。1914年11月に海軍が占領したパラオには軍人約200数名が駐留し、トラック島には海軍の司令部が置かれた。水兵の精神修養の必要性を感じていた司令官が南洋貿易会社社長の田中丸善蔵に相談したところ、田中丸は自ら信仰する西本願寺の執行部に連絡をとり、その結果北海道礼文島に駐留していた藤本周憲が新たな開教地を模索していたため南洋への派遣が決まった。当初は海軍司令部の一室を使って海軍軍人および日本人移民への布教が予定された²⁰。しかし、藤本は「南洋在住邦人」への布教を促した西本願寺と袂を分かち、単独で「島民布教」のため1918年2月コロール島に布教所を設置した。海軍の支援を得ることはできなかつたため、布教費の財源として真珠養殖業の経営を開始し成功をおさめた²¹。

真宗大谷派(以下、東本願寺)は西本願寺と対照的に組織的かつ日本政府の支援のもと「南洋群島」への開教を始める。海軍が「南洋群島」をドイツから奪取した後、欧米のカトリックとプロテスタントの宣教師は追放されたため、「南洋群島」の宗教的空白を埋めるべく、東本願寺の小林信隆が1919年にサイパン島で布教活動を開始する²²。小林は南洋興発株式会社の援助を受けて会社の事務所の建物を無償で譲り受け、一般の寄附金も募り堂宇を建立する²³。さらに南洋庁発足後の1924年、

20. 「西本願寺の南洋開教藤本周憲氏パラオ嶋に向ふ」『中外日報』1917年5月24日。

21. 「▲藤本布教使南洋 ▲新領土開教談」『宗報』第206号、1918年。(復刻版『宗報』(10)、326頁)。一方、西本願寺によると、藤本が「営利事業に手を出し」たことでコロール島への開教が中止されたという。「南洋開教中止」『中外日報』1918年2月1日。また藤本はコロール島での椰子の木の植え付けをして、椰子の実の販売による収入で南洋布教の財源を確保する計画も考えていた。「占領地の西本願寺」『中外日報』1917年12月19日。

22. Donald R. Shuster, "State Shinto in Micronesia during Japanese Rule, 1914-1945," *Pacific Studies* 5, 2 (1982): 21. 小林は1918年11月に海軍大臣の渡航許可を得て「南洋群島」に出港、その後「軍司令官と相談の上サイパンに居を定め群島布教に従事してきた」とある。小林信隆「南洋の今昔を語る(上)」『中外日報』1936年4月2日。

23. 志村秀吉『日本の熱帯南洋群島』(南陽社、1936年)、75頁。「サイパン東本願寺改築實現近し

小林は横田南洋庁長官から1万円を譲り受け、パラオ本願寺を1926年に建立。その後、毎年3,000円の営繕費と1,500円的生活費の援助を受けたという²⁴。また1932年時点では日本政府は大谷派パラオ布教所に対して700円、新教南洋伝道団に対して23,000円、天主教布教団に対し7,000円を教化事業補助として支出している²⁵。

一方、国際連盟は日本への委任統治条件として「南洋群島」での信仰の自由を保証することを求めた²⁶。そのため南洋庁は日本のキリスト教宣教師に加え、スペイン・ドイツ・アメリカのカトリックとプロテスタントの宣教師を受け入れる。1930年代に入ると、浄土宗、西本願寺、曹洞宗、日蓮宗、浄土宗西山深草派が「南洋群島」開教に参入する。浄土宗のようにサイパン島で布教を決意していた青柳貫考に教団が開教の命を与えるケースもあれば、日蓮宗の深澤前奎のように宗派が開教使を選定し布教活動を開始するケースもあった²⁷。なお天理教も1929年にパラオに進出している²⁸。

国際連盟の委託下とはいえ日本政府の庇護のもと「南洋群島」に進出した仏教教団とは対照的に、フィリピンの布教所創設は容易ではなかった。ルソン島では曹洞宗の遠藤龍眠が1903年マレー半島からの帰路マニラに立ち寄り、1906年マンカリ街に堂宇を新築し南天寺と名付けた²⁹。その際にアメリカ人数名が「官憲に対する幹旋及び浄財を喜捨し」協力したため、寄進者への好意に報いるため、曹洞宗は弘津説三と峯玄光が主任となり鑄造家の岡崎雪聲に依頼して「金造の仏像」を送ったという³⁰。「官憲に対する幹旋」という表現が示唆するように、宗教施設の新築には

南洋唯一の大伽藍』『中外日報』1937年3月27日。

24. 「南洋諸島の布教に妍を競ふ先進二大宗派片や浄土宗・片や大谷派彼地への一段の認識が急務」『中外日報』1936年3月21日。小林信隆「南洋の今昔を語る(下)」『中外日報』1936年4月7日。

25. 矢内原忠雄『南洋群島の研究』(岩波書店、1936年)、386-387頁。

26. 国際連盟は「南洋群島」における軍事施設の建設と「島民」への軍事教育と強制労働も禁じた。野村進『日本領サイパン島の一日』(岩波書店、2005年)、50頁。

27. 青柳貫考の「南洋群島」での活動については福島崇雄著『南の島に鐘がなる』(文芸社、2020年)に詳細に述べられている。深澤前奎については「ポナベ島に初の日宗の躍進」『中外日報』昭和12年4月14日参照。1930年以降、国家神道も「南洋群島」で本格化する。サイパン島では香取神社が1914年に建立されていたが1931年に彩帆神社として大規模に増築される。パラオのコロール島には1940年に官幣大社南洋神社が建立され、その後各島にも次々と神社が造営され1943年には26の神社を数えた。西原基一郎「日本組合教会海外伝道の光と影(2)―南洋伝道団について」『基督教研究』第51巻第1号(1989年)、125頁。

28. 天理教は1937年にテニアンにも教会を設立。吉永直登『テニアン―太平洋から日本を見つめ続ける島』(あけび書房、2019年)、95頁。吉永は『天理教伝道史10』を参照している。

29. 遠藤龍眠と南天寺については村嶋英治『南北仏教の出会い:近代タイにおける日本仏教者、1888-1945』(早稲田大学アジア太平洋研究センター、2023年)、274-293頁参照。

30. 「マニラ市の仏教寺院」『中外日報』1906年1月28日。「曹洞宗の海外布教」『中外日報』1911



写真1 眞蓮寺増田様よりお借りした。ダバオでの初期開教の希少な写真を見せていただいたことに深謝申し上げます。

当時の政権の許可が必要だったことが窺える。実際、西本願寺がマニラに布教所を設立した際はフィリピン政府の公認を得なければならなかった。西本願寺の命を受けた原田慶満は1918年6月に香港よりマニラに移住し布教所を設立する。1921年には布教所の会員が300名となり、布教所内に英語学校が併設され、伝道用冊子の発行も始まったことでマニラ本願寺は単一法人として登録された³¹。

ミンダナオ島では1917年東本願寺の御瀧智海が単身ダバオに渡航し布教を開始する。御瀧によると当時ダバオには日本人移民が7,000人ほどいたが、耕地植民は男性ばかりで環境が悪く、また先住民族の襲撃を受けることもしばしばあり混沌としていたという。御瀧自身、先住民が「ポロ」と称する小刀を携え、大蛇やワニのいる森林浜辺をわたり日本人殖民を慰問した(写真1)³²。1919年1月に御瀧は本山より開教使の任命を受けるが第1次世界大戦後の世界不況の影響を強く受け、食糧

年11月9日。記事には「弘津説二師」とあるが、弘津説三の間違いと思われる。『曹洞宗海外開教傳道史』には、「毎月の定例に観音講、大師講があり、百人から二百人の参加者があり、一方ルンビニ園学園を開設し、日本人児童を収容して、マニラ市内にある日本人小学校に通学する便を与えていた」(121頁)とある。

31. 「マニラの本願寺公認される」『中外日報』1921年4月24日。小島勝「マニラ本願寺布教使・山之内秀雄師の文化交流活動」、1374頁。なおマニラの西本願寺は一時期、光慶寺とも称されていたようで1943年に別院昇格しマニラ別院となる(「南洋と仏教」『中外日報』1919年3月18日。『海外開教要覧』、241頁)。

32. 御瀧智海「回南洋だより」『宗報』第207号、1919年。(復刻版『宗報』(10)、393-394頁)。

難と治安悪化のため巡回布教を一時中断する³³。1921年に太田興業株式会社の支援を得てミンダナオ島のミンタルに布教所を開設し、その後布教所をダバオ市内に移しダバオ布教所と改名する³⁴。以後、東本願寺は1934年にミンタル布教所を、1936年にダリヤオン布教所を開設する。ダバオには曹洞宗も1918年に開南禅寺を創立し(1936年から1940年に本堂と庫裡を増改築)³⁵、西本願寺も1936年にダバオ布教所を設立する。³⁶

ダバオでは東本願寺の勢力が圧倒的に強かった事情を考慮してか、1936年にはダバオの日本人「土地問題」が東本願寺の教線に影響を与えかねないとの懸念が増した。1906年の第1次土地問題に端を発した土地改正騒動は1930年代の第4次土地問題まで続き、フィリピン・アメリカ政府と日本政府を巻き込んだ政治問題に発展する。土地問題は極めて複雑だが、ダバオの日本人はフィリピン・アメリカ政府の土地改正を、アバカで成功した日本人農業会社と耕地日本人経営者への排日政策と捉え、あらゆる手段を講じて抗議した。³⁷。土地問題で日本人がダバオを追われれば、東南アジアに教線を張ろうとする東本願寺にとっては大きな痛手となる³⁸。フィリピンのコモンウェルスのマニエル・ケソン大統領もダバオに視察に来るが土地問題は解決せず、その後太平洋戦争が勃発し、うやむやとなる。フィリピンと日本の関係は日本がフィリピンを占領した時に逆転し、日本の影響下のもと成立したフィリピン共和国(第2共和制)のホセ・ラウレル大統領は西本願寺のマニラ別院に参拝するにいたる。³⁹

3 布教の内容

地政学的環境が「南洋群島」とフィリピンの布教所設立に与えた影響の違いはあるものの、布教活動には大差はなかった。布教活動は日本人移民への布教と「島民」をふくめた現地外国人の教化に分かれる。日本人移民には葬儀・法要が厳修された。

33. 御瀧智海「南洋比律賓より」『宗報』第220号、1920年。(復刻版『宗報』(11)、25-26頁)。

34. 「ミンタル布教所開設」『宗報』第237号、1921年。(復刻版『宗報』(11)、525頁)。御瀧智海「御瀧開教使通信」『宗報』第271・272号、1924年。(復刻版『宗報』(13)、184頁)。

35. 「南洋ダバオに建つ曹洞の南海禅寺十時大円氏の苦心報いらる」『中外日報』1936年6月2日。『曹洞宗海外開教傳道史』、121頁。開南禅寺は資料によっては海南禅寺とも記載されている。

36. 西本願寺のダバオ布教所は重藤郭亮開教使が1944年に昭南島(現シンガポール)に転出した時をもって閉鎖された(『浄土真宗本願寺派アジア開教史』、254頁)。

37. ダバオの土地問題については蒲原廣二『ダバオ邦人開拓史』(日比新聞社、1938年)、247-456頁に詳細に述べられており、古川『ダバオ開拓記』、451-482頁にも要約がされている。

38. 「最悪の結果に至るもダバオを確守せん大派の保木氏の近況」『中外日報』1936年5月20日。「東本願寺土壇場(?)のダバオ開教線異状 当局の同地認識を要望」1936年9月6日。

39. 「比島マニラに西本願寺別院創設米国通が集り特殊活動起すラ大統領も参拝」『中外日報』1944年2月27日。

布教所には婦人会、青年会、女子青年会、日曜学校などが組織され、布教所によっては幼稚園や日本語学校も併設された。サイパン島の青柳貫考は浄土宗からの補助金と井上恵薫尼や新宿中村屋の相馬愛蔵氏の寄付により、1936年に南洋寺とサイパン家政女学校(後のサイパン高等女学校)を設立した⁴⁰。東本願寺のミントル布教所には在留邦人2世の女子教育を目的としたミントル女学院が1938年に開設され、翌年末には第1回卒業生を輩出した。1941年には同学院の女学生が本山を参拝し、1942年には皇軍を慰問している⁴¹。布教所では「南洋群島」に駐留する日本軍人の慰問、戦死者の法要も行われた。一例をあげると、サイパン東本願寺には、1935年に南洋群島司令官東郷吉太郎中将の依頼で忠魂碑が建立され、1937年には「支那」事変戦没者法要が厳修されている⁴²。その他、地域貢献として刑務所収容囚人が増加したため、サイパン東本願寺は免囚の保護と一般行旅病者を収容する施設として司法保護機関「大慈会」の設置を計画した⁴³。

「島民」と外国人の教化には現地では布教をする方法と、日本を訪問させる方法がとられた。「島民」教化の基本方針は、サイパン島チャランカノア東本願寺布教所の日野律による「(ミクロネシア民族の民族意識を利用した)人格陶冶と文化の向上と大乘精神の涵養とを国家躍進の方向に苛酷ならざる方法を以って結びつける必要がある」(傍点筆者)という言葉に集約されるであろう⁴⁴。青少年「島民」布教の足掛かりとして、南洋寺は1936年に技芸女学校を建て、サイパン東本願寺は1937年にチャモロ族の住宅を大谷学院に作り変えた⁴⁵。またパラオ本願寺はカナカ族の青年を対象につくられた木工学校から18名の学生を集め、毎月5回の仏教青年会の訓練を行った⁴⁶。日本への「島民」訪問としての画期的な出来事は、青柳によってチャモロ族6人の青年が第2回汎太平洋仏教青年大会(1934年東京で開催)へ参加したことである。青柳をふくめた彼らの座談会は『大法輪』創刊号に掲載され、一行はその後京都の知恩院を参詣した⁴⁷。また1915年から1920年を除く1939年ま

40. 福島、56頁。サイパン高等女学校のカリキュラムの研究については、小林善帆「植民地サイパンの高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法」『民族民藝』第33巻(2017年)参照。

41. 「第二世の女子教育機関ミントル女学院」『真宗』第465号、1940年5月号。「ダバオミントル女学院生徒来山」『真宗』第478号、1941年6月号。「ミントル女学院生の皇軍慰問」『真宗』第492号、1942年8月号。

42. 「サイパン東本願寺に今秋・忠魂碑を建立」『中外日報』1935年8月31日。「サイパン本願寺 事変戦没者法要」『中外日報』1937年10月10日。

43. 「サイパン島に司法保護機関“大慈会”生る東本願寺も協力」『中外日報』1940年6月29日。

44. 日野律「南洋カナカ族の信仰」『真宗』第427号、1937年4月号、17-19頁。

45. 福島、56頁。「南洋島民の教化はまづ教育から 島民住宅を塾風に改造 日本式学園創立」『中外日報』1936年12月28日。「サイパン・ガラバン街に“大谷学院”創設」『中外日報』1937年1月29日。

46. 「カナカ青年に仏教訓練」『中外日報』1937年12月24日。

47. 福島、64-70頁。『大法輪』第1巻第1号(1934年10月号)、258-265頁。

で、毎年1回「南洋群島」からの「内地観光団」が組織され、「島民」が数週間にわたって日本に滞在し各地を回って帰国している⁴⁸。1919年に海軍省が主催した「島民」観光団は京都の東本願寺本山を参詣しており、その後も表敬訪問は続いた⁴⁹。一方、フィリピンではマニラ本願寺の山之内秀雄が中心となり1935年5月に「ヒリツピン学生団」を組織し、西本願寺本山参拝と信徒との親睦会をふくめた二国間の文化交流を推進している。フィリピン学生訪日視察団は1940年まで毎年開催されるが、日中戦争が本格化する1937年以降、参加者は減少する⁵⁰。このなかにフィリピンの先住民族が含まれていたかどうかは不明である。

4 教化の実態

開教使は「南洋群島」とフィリピンでの日本人移民と「島民」・外国人への布教に努めたが、その実状はどうだったのだろうか。「南洋群島」とダバオの日本人人口の半数以上は沖縄県出身者で占められていたため、日本人移民の布教対象の過半数は沖縄県民だったといえる。実際、パラオ本願寺開教使の石上龍城が家族に当てた手紙（以下、石上龍城書簡とよぶ）によると信徒の9割が沖縄県民だったという⁵¹。そのため盆は新盆、8月のお盆、旧のお盆と3回にわたって信徒の参詣があった⁵²。ちなみに秋の彼岸の忙しさを石上は次のように書き留めている。

今日は彼岸の中日で朝から本当にお経地獄でした。百五十位は来たでせう。それを小経、和讃、御文と型の如くやるのでいささか疲れます。尤も全部で三分位（くらい）で片附けますけれど。御文をすまして後を見ると、もう済んだのかと云ふやうな顔をしてほかんとしてゐます。然し本堂の中には何十組と云ふお参り連中が待ちかまえてゐますので、好む好まざるに依らず、相

48. 千住一「委任統治期南洋群島における内地観光団（1928-1930年）」『奈良県立大学研究季報』第24巻1号（2013年）、59頁。

49. 「南洋人の来山」『宗報』第216号、1919年。（復刻版『宗報』（10）、641頁）。1928年・1929年・1930年の内地観光団の行程によると、京都では必ず東本願寺が記されている（千住、92-94頁）。一方、「南洋群島」から西本願寺本山への参詣も1923年と1924年に記録されている（『浄土真宗本願寺派アジア開教史』、259-260頁）。

50. 小島「マニラ本願寺布教使・山之内秀雄師の文化交流活動」、1376-1377頁。早瀬、179-180頁。

51. 石上龍城書簡1941年9月15日付。石上龍城氏の書簡は、行春寺石上様からお借りした。貴重な一次資料を快く提供して下さったことに感謝申し上げます。石上龍城氏は1941年6月にパラオ布教所（パラオ本願寺）在勤・パラオ本島布教所開設係の任命を受け、その後ジャバに派遣、従軍している。1944年12月には長崎の臨時魚雷艇訓練所に所属し、翌1月に戦死。パラオの在勤は短期間ではあったが、行春寺に残してきた家族を気遣った心優しい手紙が多く残っている。そのなかから部分的ではあるが当時のパラオの状況を窺い知ることができる。

52. 石上龍城書簡1941年9月1日付。

手の顔色などに頓着してはゐられません。お骨を出し線香をくべてハイ、何々さん、次、何々さん、とまるでお経の配給です。四百体からのお骨の預りがあります⁵³。

沖縄では先祖崇拝が強く仏教儀礼を慰霊や追悼の形式として受容してきた⁵⁴。そのため短時間での「お経の配給」は不満だったかもしれない。同時に「宗派意識」の薄かった沖縄県移民にとって、親鸞の教えはあまり意味をなさなかつたらしい。石上は「今日まで三日間報恩講ですけれど、参詣者もなく少しも報恩講気分もしません」と綴っている⁵⁵。

その一方で、親鸞の教えに共感する沖縄県移民もいたようである。御瀧はダバオで布教を開始した当時の状況を次のように述べている。

平素仏縁遠き島根、佐賀、群馬、栃木、岩手、福島あたりの各県人が念仏のいわれを聞き喜ぶこと一方ならず、殊に沖縄県人は一種特別の気風ありて他県人とは交際致さず、之に接近するには随分と困難の点あれども、種々苦心して接近し念仏の謂れを物語るに至れば歓喜措く能はざるもの如くに候⁵⁶。

後にダバオには東本願寺の布教所が3つできるが、戦前の沖縄ディアスポラで、どの程度浄土真宗の教えが理解されていたかは明らかではない。しかし布教所の立地条件、開教使の人事異動の頻度、そして開教使個人の取り組みによって、仏教が沖縄移民に理解されていた度合いは異なっていたと推察できよう。

「島民」布教については、先に日野律の「南洋群島」での「島民」教化方針を紹介したが、開教使が「島民」布教に好ましい結果を見出した事象と、そうではない状況がみられる。前者の例として1937年にパラオのコロール島出身でサイパン島に移住したカナカ族の青年（「タマロウ君」22歳）の葬儀が本人と遺族の希望によって「純大谷派仏式」で行われたことがあげられる。小林と日野が祭司をつとめるなかカナカ族酋長をふくめ多数の「島民」が葬儀に参列したという⁵⁷。この葬儀との関係は明らかではないが、1939年に小林は本堂に至る参道工事に際して、今まで築いてきた関係性をもとにカトリックの「島民」から土地を永代無償で使うことが

53. 石上龍城書簡1941年9月14日付。

54. 川瀬貴也「琉球・沖縄仏教研究史について」上杉和央編『沖縄の宗教・葬送儀礼・戦没者慰霊』（京都府立大学文学部歴史学科、2019年）、5頁。

55. 石上龍城書簡1941年11月28日付。

56. 「南洋の比律賓より」『宗報』第213号、1919年。（復刻版『宗報』（10）、541頁）。

57. 「カナカ族初の佛教葬大谷派南洋開教の収穫」『中外日報』1937年5月12日。



写真2 青柳貫考氏の写真や資料は正嚴寺福島崇雄様よりお借りした。

許可されている⁵⁸。また日野もミクロネシア民族の宗教事情を調査するためカナカ族の酋長ワンブランコらと対話をしている⁵⁹。

一方、青柳貫考は「島民」に日本の近代文明を紹介することで、仏教への関心を高めようとした。チャモロ族に仏教を最初から説くことは不可能なため、青柳自身「身をもって」仏教を示すことに徹した。例えば知恩院の高僧が先述したチャモロ族6人の青年を祇園の料亭で芸者を招いて歓迎した時は、青年らと共に中座したといわれている。そしてサイパン島の「内地人」（サイパン島の日本人）が「島民を馬鹿扱ひするのは非常に困ります」とも述べている⁶⁰。実際、青柳は「南洋群島」の「島民」とは友好関係を築いており、ヤップ島の酋長が今まで他の誰にも寄進しなかった土地を青柳に提供し、そこに寺と宿泊施設を建てる計画が練られた。青柳と先住民の交流の深さは写真からもがうかがえる（写真2）⁶¹。

開教使が「島民」布教に成果を見いだせなかった例は、阿部襄（1934年から

58. 「異教徒の島民から永代無償土地使用権多年の難問解決—サイパン本願寺面目一新」『中外日報』1939年1月22日。

59. 日野「南洋カナカ族の信仰」、19頁。

60. 『大法輪』第1巻第1号（1934年）、263-265頁。福島、69頁。

61. 「酋長も土地を提供浄宗ヤップ島に新教線内地学生招き宿泊に寺を開放」『中外日報』1941年6月1日。資料の多くは既に福島崇雄『南の島に鐘が鳴る』（文芸社、2020年）で公開されているが、資料を貸し出してくださったことに御礼申し上げます。

1935年にかけて熱帯生物研究所でサンゴの研究に従事)が戦後に残したパラオ本願寺岡田澄圓(ないし岡田澄圓)開教使との会話の回想に見出すことができる。

当時カナカの公学校の生徒たちが、お寺によく集まっていたが、仏教の信仰のお話を聞かせていたようです。しかし、生徒たちは地獄極楽の話をして、よく信じないので困ったものだったということでした。それで「では和尚様は信じなされるでしょうか」と申し上げると「わしは信じていませんよ」といって笑い出しては般若湯をのんでいました⁶²。

岡田にとって仏教が「島民」に受け入れられなかった理由は、ミクロネシア民族に伝わる独自の宗教観に起因する。実際、日野も「一つの民族からその宗教的観念を取り除くには極めて緩慢な漸進主義」が必要と述べている⁶³。加えて「島民」が日本語を学ぶことを前提にした布教スタイルも、「島民」に仏教が伝わらなかった要因と考えられる⁶⁴。

また布教所拡張のため「島民」の反感を買った事例もある。パラオ本願寺の岡田は「島民」ウバイの土地を借用して寺院経営をしていたが、寺院拡張のため、南洋庁パラオ支庁区の支庁長の協力のもと、本願寺に隣接する「島民」イシカワの土地の一部を無償で入手した。イシカワの抗議にもかかわらず、支庁の土地係はイシカワに「そうするのが本願寺という寺の為であり、ひいては皆人の為になることだから、お前は土地を全部引き払ってパラオ本島に行け」と言ったという⁶⁵。この背景には、わずか8平方キロメートルのコロール島に、約千人の「島民」に対し1939年4月までに8千人以上の日本人が移住することになり、「島民」と在留邦人との土地をめぐる問題が多発していたことがあげられる⁶⁶。

「南洋群島」におけるミクロネシア民族への布教の実態は、サイパン島ガラパンと

62. 寺尾紗穂『あこのころのパラオをさがして—日本統治下の南洋を生きた人々』(集英社2018年)、138頁で引用されている。

63. 日野「南洋カナカ族の信仰」、17頁。

64. 多くの開教使が「島民」に日本語を学ばせて仏教を説こうとしていたなか、ポナペ日蓮宗の深澤はスペインのカトリックとアメリカのプロテスタントの宣教師を真似て、開教使が「島民」の言語を学ぶ必要を訴えている。「南洋の開教語る帰朝した日宗深澤氏」『中外日報』1939年1月6日。「日本式」を維持したまま「島民」に布教する状況は、1940年8月に「南洋群島」の日本人を慰問した法相宗管長の大西良慶からも批判されている。「南洋群島を語る日本宗教何しとる天主教まかせの島民教化大西良慶氏談」『中外日報』1940年9月1日。

65. イシカワという名前は日本人を彷彿させるが、「島民」が日本人を模倣して名乗っていたのか等、詳細はあきらかではない。

66. 清水久夫「1930年代コロール(パラオ)における『土地問題』—日本人と島民間のトラブル」『跡見学園女子大学文学部紀要』第53号(2018年)、211-214頁。

パラオのコロール島の違いにみられるように、島ごとに、また島に住むミクロネシア民族別に分析していく必要がある。ダバオにおける先住民族との関係は今後の調査を待たねばならないが、御瀧によるとミンダナオ島には30の部族があり、大別すればピサヤ族、モロー族、バコボ族が多かったという⁶⁷。

「南洋群島」とダバオでは東本願寺の勢力が強かった。東本願寺の法主大谷光暢と裏方智子は1941年1月末より南洋方面を巡教し各地で報国法要と開拓者追弔を厳修した。その際パラオでは大酋長アイバドル翁ら「島民」16人が「おかみそり」を受け、ダバオでは法主一行がカリナン小学校でバコボ族の踊りを「観覧」した⁶⁸。その一方で宗派間の競争と協力の両面があったことを記しておく。競争に関しては、サイパン島とロタ島で東本願寺が勢力を拡大する浄土宗に対して懸念を示している⁶⁹。しかしボナペでは東西本願寺と浄土宗が童話紙芝居研究発表会を毎月1回開催し⁷⁰、ダバオでは開南禅寺と東西本願寺が協力して雑誌『仏道』を毎月2,000部発刊し在留邦人に無料配布し、また連合講話会を各地で実施したという⁷¹。

おわりに

第2次世界大戦以前の「南洋群島」とフィリピンの日本仏教教団の布教についてはまだ多くの調査が必要であるが、少なくとも次の3点について確認ができた。第1に「南洋」では、ハワイや北米大陸、東アジア地域とは異なる地政学的環境のもと開教が行われたことである。第2に「南洋群島」とダバオでは布教対象の日本人移民の多くが沖縄出身者であった。換言すると、いわゆる「沖縄開教」は沖縄本島のみならず「南洋群島」でも行われていたことを意味する。第3にミクロネシア人は仏教儀礼に関心を示したが、どれだけ仏教教義を受容したかは不明である。そして開教使はミクロネシア人に仏教を強要しなかった（あるいは強要できなかった）と考えられる。個人差はあるものの開教使と「南洋群島」の先住民族の関係は1930年頃までは比較的良好だったと推察できる。またミクロネシア人々も日本を通じて「先進国」の文明を取り入れることに意欲的だった。国際連盟の信教の自由を保証するという委任統治条項が抑止力になったことは言うまでもないが、今泉裕美子が指摘

67. 御瀧智海「回南洋だより」『宗報』第207号、1919年。（復刻版『宗報』(10)、393頁）。

68. 法主と裏方はパラオ→ダバオ→タワオ（旧イギリス領北ボルネオ）→メナド（旧オランダ領）→ダバオ→パラオ→ヤップ→テニアン→サイパンのルートで巡教をした。「異邦の諸民族にも大乘佛教の眞髓説く南進国策翼賛への信念 光暢法主けふ南洋の旅へ」『中外日報』1941年1月30日。「大酋長も帰依パラオの帰敬式 光暢法主南洋巡教」『中外日報』1941年3月4日。法主と裏方のダバオ巡教の写真は善福寺廣幡様から見せていただいた。貴重な写真を提供してくださったことに感謝申し上げます。

69. 中西「附章 南洋布教の概要」328、330頁。

70. 「ボナペ仏教会三派合同で創立」『中外日報』1942年11月8日。

71. 蒲原、704頁。

するように委任統治が海軍統治期のキリスト教政策を反映し信教の自由とは矛盾した目的で行われたこと、「委任統治の本質が『文明化』としての『日本化』であった」ことをふまえると⁷²、仏教教団は「島民」へ仏教を強要することも出来たはずである。その意味ではセトラー・コロニアリズムを推進した欧米のキリスト教とは異なった植民地での宗教形態の事例と言えよう⁷³。

しかし仏教教団は経営する学校で島民に日本語教育・皇民化教育を施し、日中戦争勃発以降、国家拡張に準じた開教方針を強化していく。「南洋群島」では島民への神社参拝も強要される。そして「南洋群島」とフィリピンでは多くの「島民」、フィリピン人、先住民が戦争の犠牲となる。最後に本稿では「南洋群島」での「朝鮮人」への布教、ダバオでの華僑と開教の関係については言及できなかった。今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP25K03597 の助成を受けたものです。「南洋群島」とフィリピンの開教を調べるにあたり、槻木瑞生の「『中外日報』紙のアジア関係記事目録」を参照にしました。

みちひろ・あま
(大谷大学)

72. 今泉裕美子「日本の南洋群島統治におけるキリスト教政策—海軍統治期を中心に」『アジア経済研究所1995-1996年「太平洋島嶼国の社会変容とキリスト教」研究会第1回報告書』（1996年）、36頁。

73. 欧米キリスト教の「南洋群島」での布教の実態を論じることは容易ではないが、1660年から1680年にかけてのスペインのカトリック布教では多くのチャモロ人の血が流され、また神父も虐殺されている（西原、77-80頁）。その一方、アメリカン・ボードの宣教師たちは「自立、自給、自由の教会形成」を推進し、アメリカの社会や宗教制度は強要しなかったという（西原、94頁）。

表1 各宗派の布教所と開教使のリスト

「南洋群島」South Sea Islands					
宗派	布教所開設・堂 宇建立地	現在の地域	開教使	駐在年	注記
東本願寺	サイパン Saipan ガラパン布教所 (サイパン東本 願寺) Garapan 1919年～1920 年に開設。 1930年に堂宇 建立。	北マリアナ連邦 The Com- monwealth of the Northern Mariana Islands	小林信隆	1919-1924?	
			三木了薫	1926-1932	
			武村義昌	1927-1934	
			柴(紫) 津 憲丸	1930-1931	
			畑佐俊雄	1931-1936	
			川島立尊	1934-1937	
			川島栄正	1934-?	
			大聖寺猛	1935-?	
			小林信隆	1936-1944	
			服部一雄	?-1937	
			奥村高文	1938-1939	
			長正道	1939-?	
			緒方停	1943-?	
			梅崎◇◇	?-?	
	チャランカノア 布教所 Chalan Kanoa 1936年開設。		日野律	1936-?	パラオ兼任。
	トラック島布 教所 Truk Isalnds 1920年頃に開 設?	ミクロネシア 連邦 Feder- ated States of Micronesia (FSM) The State of Chuuk	小林信隆	1920?-?	

「南洋群島」South Sea Islands					
宗派	布教所開設・堂宇建立地	現在の地域	開教使	駐在年	注記
パラオ布教所 (パラオ本願寺)Palau 1926年にコロールKoror町5丁目に堂宇建立。	パラオ共和国 Republic of Palau State of Koror		小林信隆	1924-1926	
			三木了薫	1932-?	
			深谷秀雄	1935-?	
			松島智見	1935-?	
			岡田澄圓	?-1937	あるいは岡田澄圓とも
			川島立尊	1937-?	
			中山 隆	1937-1939	
			高木俊昌	1938-1941	
			柏尾顕雄	1939-?	
			石上龍城	1941-?	
			北條義宗	1941-?	
			福田清松	1941-?	
			大山信映	1942-?	
			青樹信正	1942-?	
			太藤順雄	1942-?	
			首藤戒定	1942-?	
			山崎辰夫	1942-?	
			高田◇覚	1942-?	
			中山正	1942-?	
旭賢雄	1942-?	ミンタル在勤でパラオ兼任。			
平川繼人	1944-?				
ロタ布教所 Rota 1936年に開設。	北マリアナ連邦		畑佐俊雄	1934-1942?	サイパンとロタ兼任、1936年にロタ布教所在勤。
ポナペ布教所 Ponape 1935年に開設?	ミクロネシア連邦 FSM Pohnpei State	大聖寺猛	1934-1942?		
		山内巖	1935-?		

「南洋群島」South Sea Islands					
宗派	布教所開設・堂宇建立地	現在の地域	開教使	駐在年	注記
	クサイ布教所 Kusaie 開設年不明。	ミクロネシア 連邦 FSM Kosrae	?	?	
	テナン布教所 Tinian 1930年に開設。	北マリアナ連邦	柴(紫) 津 憲丸	1930-?	
西本願寺	パラオ布教所 Palau 1926年に藤本 周憲が単独で 開設したが 西本願寺に認 可はされてい ない。 1936年にパラオ 布教所創立。高 島芳信赴任。 堂宇があったと 思われる。	パラオ共和国	藤本周憲	1914-?	開教使の任命は 正式には受けてい ない。
			高島芳信	1936-?	
			岩佐昭雄	1940-1941	
			朝戸友秀	1943-?	
	テナン テナン布教 所。 西本願寺が本 格的に南洋開 教に着手したの は1929年。 Tinianに1932 年、最初の布 教所が成立さ れる。	北マリアナ連邦	岩佐昭雄	1932-1946	
	高島芳信		?-?		
	チューロ布教所 Churro 1939年開設。		前田正栄	1939-?	
			日高硯見	1941-1946	

「南洋群島」South Sea Islands					
宗派	布教所開設・堂宇建立地	現在の地域	開教使	駐在年	注記
	ヤップ布教所 Yap 1938年開設。	ミクロネシア 連邦 FSM The State of Yap	岩佐昭雄	1938-?	
			前田正栄	1941-1946	
			亀山倫雄	1943-1945	
	ポナペ島 ポナペ布教所 Ponape 1941年にコロニ ヤ町に開設。	ミクロネシア 連邦	岩佐昭雄	1938-?	
			西脇法雄	1941-1943	
			山根智巧	1941-1943	
			三屋教信	1943-1945	
	マタラニューム 布教所 Mado- lenihmw 1943年開設。		西脇法雄	1943-1945	
	サイパン布教所 Saipan 1941年開設。	北マリアナ連邦	垂髪猛雄	1941-1942	
			日高硯見	1941-1946	
			飯田義見 (南洋開教 監督)	1942-1943	
	グアム Guam 1942年開設。	アメリカ合衆国 準州 Territory of the USA	垂髪猛雄	1942-?	
浄土宗	サイパン布教 所(南洋寺) Garapan 1932年に開 設、1937年に堂 宇建立。	北マリアナ連邦	青柳貫考 (初代布教 監督)	1932-1945	
			青柳千代子	1932-1945	
			潤間法玄	1934-1936	
			渡辺観光	1934-1936	
			坂本隆雄	1935-1941	
			榊禎純	1936-1938	

「南洋群島」South Sea Islands					
宗派	布教所開設・堂宇建立地	現在の地域	開教使	駐在年	注記
			内山泰信	1936-?	
			内山テイ	1936-?	
			里見嘉隆	1936-?	
			石沢隆光	1940-1941	
			向田興倫	1942-1943	
			横山大運	1943-?	
			横山静江	1943-?	
	ロタ布教所 Rota 1935年ないし 1936年に開設。	北マリアナ連邦	里見嘉隆	1936-1940	
			和田真光	1940-1946	
			和田リエ	1940-1946	
	ポナペ布教所 Ponape 1939年ないし 1941年に開設。	ミクロネシア 連邦	坂本隆雄	1941-1944	
			坂本喜代子	1941-?	
	ヤップ布教所 Yap 1941年に開設。	ミクロネシア 連邦	石沢隆光	1941-1942	
青柳貫考			1942-1945		
木下隆生			?-?		
曹洞宗	サイパン Saipan 1931年開設。	北マリアナ連邦	乙部呑海	1931?-?	
	テニアン春海寺 Timian 1931年に開設。 堂宇があったと 思われる。	北マリアナ連邦	乙部呑海	1931-?	
			島津優道	1932?-?	
			馬場良价	1934-?	
			黒岩義孝	1942-?	黒岩はアメリカ合衆国の北米別院に1929年-1934年に駐在している。
		中尾證道	1942-?		
日蓮宗	サイパン布教所 Saipan 1934年に開設。	北マリアナ連邦	?	?-?	
	ポナペ 布教所 Ponape 1937年に開設。 (その後閉鎖される。)	ミクロネシア 連邦	深澤前奎	1937-?	

「南洋群島」South Sea Islands					
宗派	布教所開設・堂宇建立地	現在の地域	開教使	駐在年	注記
西山 深草派	パラオ Palau 1938年に開設。	パラオ共和国	廣瀬準隆	1938-?	
			黒川恒順	1942?-?	実際赴任したかは不明。
			浅井慶全	1942?-?	実際赴任したかは不明。

フィリピン The Philippines				
宗派	布教所開設・堂宇建立地	開教使	駐在年	注記
東本願寺	ミンダナオ島 ダバオ布教所 Davao, Mindanao, 1921年にミンタルに布教所を設置その後ダバオ市内リサル街に移転しダバオ布教所とする。 1924年ないし1925年にダバオ市内クラベリヤ街に一字を建立し御瀧智海は帰国。 1935年に今井公巖がダバオ市内アング街移転新築。	御瀧智海	1917-1925	
		今井公巖	1925?-1939?	
		保木俊雄	1934-1935?	
		宮城文雄	1934-1936	
		旭賢雄	1937?-1937	
		廣幡里見(兄)	1938-1939	ダリヤオン在勤ダバオ兼任。戦争中に現地で死去。
		廣幡朝人(弟)	1941-?	ダリヤオン在勤ダバオ兼任。戦争中に現地で死去。
	ミンタル布教所 Mintal 1934年堂宇建立。	保木俊雄	1935-1937	
		宮城文雄	1936-1937	
		旭賢雄	1937-?	戦後、本山宗務所で勤務。
	ダリヤオン布教所 Daliaon 1936年堂宇建立。	廣幡里見	1936-?	
廣幡朝人		1937-?		
西本願寺	ルソン島 Luzon マニラ布教所、光慶寺とも呼ばれた。 1919年に開設、1931年に堂宇建立。 1944年に別院昇格。	原田慶満	1916?-1936	
		多田諦雲	1920-1923	
		山之内秀雄	1925?-1944	
		木曾諦道	1942-1943	
		橘 哲雄(別院輪番)	1943-1945	
		戸田正真	1943-1945	
		西 真雅	1943-1945	
		龍溪玄深	1943-1945	
		藤本寛瞭	1943-1946	
		楠 幸法	1944-1945	
		山名演暢	1944-1945	

フィリピン The Philippines				
宗派	布教所開設・堂宇建立地	開教使	駐在年	注記
	バギオ布教所Baguio ベンゲット州 1936年開設。	立花政美	1936-1945	
	ミンダナオ島 Mindanao ダバオ布教所 Davao 1936年開設、1944年閉鎖。	山口経邦	1925-1926	実際には赴任していない。
		武田奎識	1926-1926	実際には赴任していない。
		重藤廓亮	1936-1944	1944年重藤廓亮が昭南島へ転出した後ダバオ布教所は閉鎖。 重藤廓亮は戦後アメリカ合衆国のThe Buddhist Churches of Americaに赴任。
		重藤春栄	1942-1944	
曹洞宗	ルソン島 Luzon マニラ南天寺、Manila 1903年ないし1905年頃に堂宇建立。	遠藤龍眠	1903-1916	
		東賢隆	1915-?	
		伝田道皎	1924-?	
		林敬一	1927-?	
		松沢義雄	?-?	
	バギオ日本寺?	?	?-?	『最新曹洞宗寺院名鑑』(1926年)には記載されているが『曹洞宗寺院名鑑』(1937年)には記載されていない。
	ミンダナオ島 Mindanao、 Davao ダバオ開南禅寺(ダバオ海南禅寺) 1918年に開設、1937年に市内マグリヤネス街に堂宇建立。	東賢隆	1918-?	
		十時大円	1916/1923-?	戦争中に現地で死去。
		池田元良	1927-?	

2025年4月30日現在

注1 出典によっては開教使の滞在年が異なることがある。開教使の名前が不明ないし漢字が判明しない所は◇印を入れている。

注2 布教所に関しては規模の小さい布教所だったのか、堂宇が建立されたのか確認できない所がある。

注3 開教使に関しては戦争で死去したのか、戦禍を免れて戦後にどのような活動をしたのか不明な点が多い。

出典

東本願寺 『宗報』復刻版、機関紙『真宗』

西本願寺 『海外開教要覧』、『アジア開教史』

浄土宗 『海外開教のあゆみ』

曹洞宗 『曹洞宗海外開教傳道史』

『仏教植民地布教史資料集成』第3巻、第6巻

『中外日報』

その他、論文で引用された資料による。